當ゝ度の新板

新板錦耳袋

席幕

板岸草　板の爲
不思新古子の爲
上野二枚橋の爲

国工　武田文来孫
大蒙羊　錦壽堂発兒

初編

此草紙賣ところ
所々
更に
人々
面々
勢ところ

武田交來録
初編中
大蘇芳年畫
錦壽堂梓
初編下

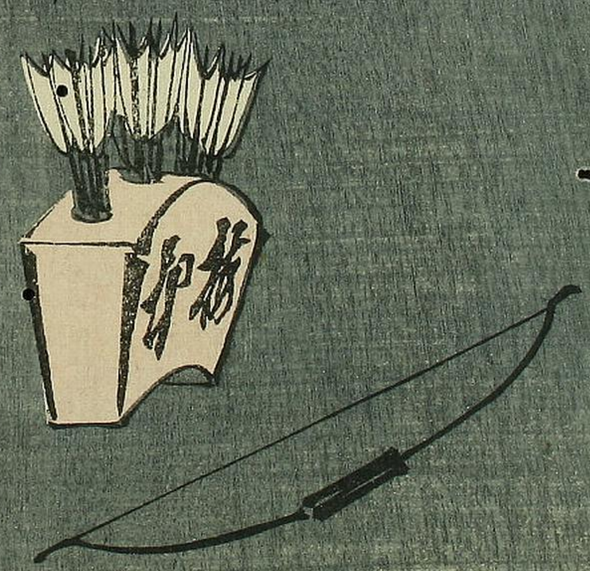
A507
1

霜夜鐘十河の辻筮 初編上

交舞伎
新報援華
交来録

大蘇芳年画

錦壽堂梓



C48-82597

霜夜鐘初編上

歌舞伎新報めく江湖の鳴響きをる霜夜の鐘ハ河竹翁が意中の新案実ハ活歴史の名に背ぬ能く穿ちる人情世態劇場通なるぬ我輩ちら此役々ハ誰々ちるぐんと自然と浮む舞臺の形容夫を其侭傚寫て當今流行る草双紙ハちるぐんと錦壽堂の主人が目論見画工ハ名ハ月岡大人大蘇芳年の辻筮ハ幸先祝ふ大吉利世話狂言ハ三幕つゞきを三冊物の三編ふゝ切以下ハ次号と引延バきゞ幕間を急ぎ出版ちるべく御覽之程を冀ふと板主ちるが新相中先ハ發端芋坂の場ちるぐまをきる

明治十三年夏日

武田交來記

霜夜鐘初編
豪家悴稲田豊三郎
矢場の娘お嬢於兼

霜夜鐘十時辻筮初編上之巻

振岸芋坂の橋

名ゆゝしかふ東の比叡の裏手なる初音の▲淋しいあいねえ「ずいもうまく完」破らふ里も冬枯て蕭条敷しく細流を堰と卜樋本孫二人い蕎を擔げ我家と古手ゆえ色つく谷ぢ〳〵通ふ芋坂の向ふ さして急ぎ引遠へて来うるい来る二人の樋本孫「今夜い波ふ強るぐらふと 士族とゆえる夫婦連れ妻い乳呑兄抱うゝ夫ふ向い云るい「モシ旦那 今打ます」うい何時でぞうませう「夜日 九時う十時であらう「左程で往来ふ人も あく大ぶう淋しうぞう来ふ「巻で髪ら い淋しい而夫ふ氏ふ出発ふ当が宵ふで 疾ふへちいふと往来ふ人いふい

つゞく

つき
谷中ホ
ホ
ヘ
ト
チ
リ
ヌ
ル
ヲ
ワ
カ
ヨ
タ
レ
ソ
ツ
ネ
ナ
ラ
ム
ウ
ヰ
ノ
オ
ク
ヤ
マ
ケ
フ
コ
エ
テ
ア
サ
キ
ユ
メ
ミ
シ
ヱ
ヒ
モ
セ
ス
ン
ゴ
ロ
ク
ハ
ヤ
ヨ
ヒ
ト
ツ
ト
ヨ
ウ
ア
ル
ヒ
ト
ガ
ア
ル
ヒ
ト
ガ
ア
ル
ヒ
ト
ガ

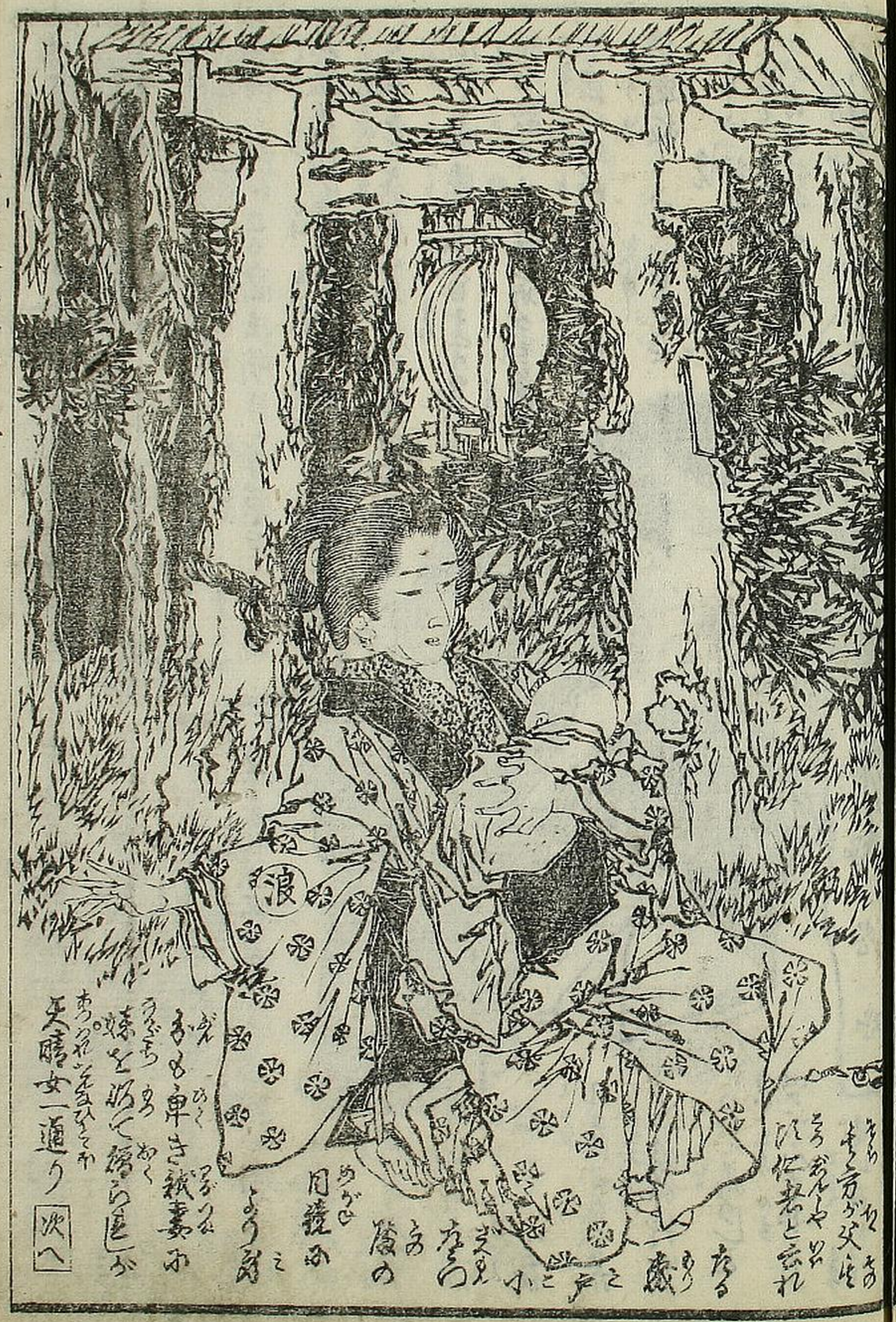
正

浪

つぎ 高寺と称り住来なる草板へ今宵生方を連出」云 ▲「お目と知めてどざりまする
此所でそれと打為し偽漢が密出と共通世」徒拙と白て有者 云を聞くくるり正二弁が浪の
徒がこう番とゞ拙少ハフト
浪出八「コモ乱れ計り
いん頼ゆ比」ど
今更ゆふ君
勢ゆゞう赤ぎ
四幕鬼
の形成
勤める
徒士猫の
既と
云い

正

ちゝ絲々
密通世」と
▲▲



生方が丈夫
ろ者やは
仁者と云れ
る
歳
小
戸
と
の
の
用達か
ゆ
車さ被素か
嫁を助て婦ら色」か
天晴女一通り

次へ

つき
行義い素ゑの漢出数盤糸状の通さも
人の揺き〜宝方放ゆ六蒲い果報者多の
若代も会生てる宝者びも瓦解の悲〜こ表
擾脱〜仕訓ざる高法開き生還世合図
不孤失ひて今い生日の海計り奥ゆ迫う
て主業ゆ代四三帝せる寂りてゆくも
偽次と密通〜今日主生ぎく姿
我を駆く人で臣めゆモ迫昭
生業い偽治と郎〜ゲ生ゆ
密通絞〜こと愛てぎ
望本ゆ「伝とゆ走偽治
ふ代ゆを保せるせろ
ゆの偽生一通り
傳
孝
▲お岡ゆされてりさろ
生世〇恋生も絞さ仮
紅の月二日の晩でぎろ
本走ゆ明夏の三浦接と
夜烟
ゆゆ出
ゆさ臣ゆろゆ愛生生紅て石へ
ひと
ゆて
外
せ
ゆと
中し本
故余儀な
く寂ゆ生ゆ
酒代密通絞
してぎろまる
一個ゆぎ代れ
ゆる「ゆきろゆ次へ

つゝき

糸が色を隠せ天命を偽沢が

殺世

義を仕ろけ

否とや

をかけ

かゝる事

せと帯

の君の中芸

涙の

新笑お浜八丈の絽刀取あげ

ろうふく 紋附 裏五

丸ぶ教ゑく六浦

お浜ゆい自殺をせ〜ゝト

抱き起せば生をかはさろう

ゝと笑の為ゆゑ世を世

縁世上ろうハ生て世ゆ居ら世

ませうぞ 笑も笑の為ゆれば命を

捨ゆゑ及ばぬに「イエ〜く死当ればこう

本ぬ」とハ又伝授「浜茶と遠ひ今の世ハ

なら士族の身の上でも人を殺せばそれ

ぶみのお詫め交ねば成本ぬ人ゆ云ゑ

お望とそ危よく お達〜ゝ

正

人さま

ゝんを殺

生ゑ引有

血死始ゑ除

絶のゆれゆ

右命の新を

ろうゆ

好き雷ト

あるゝの患ひを除くと既ゆ疫病

ゝ殺し我身も共ゆ命をもて

偽沢れ形があるべき

ゝ形ある知ら世偽沢を

出る

つき月

●仲右の勘六が為もまだ引とらへ

「コレ私が紙入を返してやさい」

猿「ムヒ飛弁ハ途方も有へ己れが紙入と知ることのふめうせ」

「濡れ

路で五寸とんで

巻門ふ遠ど陸ひ

此方が猿ふ遠

ひの

「そ

ア夢覚

五寸覚ど

ふを巻て彼ろ

ふ横れあざ何で

級ちト洞ふ入る行ふた

五寸を巻る猿の勘四三郎ハ吐

息をつき「きのふふ巻る今日の勘ハ

ふ巻き裏りもあ洞て巻き猿しの

根岸門妻のあれふ神経る

しれを巻ふ巻ふ巻猿る

用ふ長ふ子巻猿る

松ふあれ共世をふふ拾て

散ふふ夜嵐ト

小四の法をすり

ふぐふ丸猿をそ

て長ふ不役ふ、

法ふくぐふく「ア夜ぢゃア

○不思彩ちふの場▲

▲ふ久ハ上野の猿

小路松源の裏ま与る池ふ照ふ月陽り

巻者ふの猿長を逆ふ夢ふ大家の息ふを同ド●

ト☒

毛ゥ盗物ご

☒ふの

辛ひ

のわちふふ

ふ巻ひ号の場丹

池ひ面一来

かを

ふ

ふ

ハ

猿遠

ひの

次へ

つゞき 宣覆きっちゃ「イヤ宣覆でんぐろ」○さ「ふ〜〜く盗らぬ遠ひあへぬ
ぬ 私の紙入を此者が盗ま」と言「イヤ」さる「コレあく盗人にあらア
猪さ学えんぐろ来ぬ丹「何者ぞがあるぬろ」がっさる
性ろもあく又摘ぐあさる「イヤ武ろを二人とる八十日
の苦渋をしん実ふとろく仕ま」さろふ盗い止め
て仕舞ま」と丹「イヤ止さらい云さ成サア盗
ど紙入を出して仕舞」と猪義が襟ぐび
成て引寄ろ此財密と紙入を丹義が
袂へ入るる「ろが変ろ親ろふ
きろ出れるも出もぐさる「実ふ私
らア盗を来ぬ丹「ろぐ出ぐ成で裸ふ
されトられて猪義三天帯と
ろ元ろ「サア何ろぐ改めろ」

○ト考こ亦に
おてろるを丹義
押とあ丹「コレ何で手荒い
ぞるるのぐを苦遠ぐ唯の去ろ
ぞる「以前い
以前救免後
私ら
二人
ちを掘
いぐ居
ぐ鬚
寄藤
成只
釣を相へ

中の巻へ

上よりつゞき 元「盗人のあを付らるそろ此後
でい御され来ぬ丹「ちをされぬ
ぬ」と言「ふ」と言ると言「ふ」と言
ふ黒「あい」と言ると言人を
成目めうけて丹後に考こ亦
ぬ打向い「モシお前い何者の
お家名前い何と仰
あるい来考「イイ私い
親ろ縁下上物宮橋
田町壱丁目三番地ぐ
異板浪世稲田
作右衛ろ門
考こ亦と言

○此亦いと考内浅草須小路
松坂屋と言ち旅人宿ふ逗留ぐて
居り考る丹「コレテ盗ちとしふ紙入考「袁
ハ家産紛裏ハ古紙ふ物ふふ牡丹の絵
金物丹「中ゆい何かとぎり考る」「五百
円の代金紙幣十四枚で七十四入て亦
来こ丹ふ考ち中ふ七十円ト二人報とそ
合せる言「コリヤ彩しちいん「居ふれぬ」ト二人い急
ぎ逃出せぐあじいせ〜と丹後ハ二人を追ふて行
追ふ考こ亦ハ途方ふ暮れ「喉四の物者の
が紙入彩宮を漁ぐらぐ成強こ亦中異切とられこ
彩宮みまく紙し
入を盗ぐ成ぐろふ
考こ亦宮目で

つゞき

ゐ七十四
い兎も
角も面
引先へ
五百四
貸ゝ
幾出と
美し

祝父の前へ云伏し
宿へ帰つて休ます

▲母の恵しこりや

○此画様はお兼が豊二郎へ物ぐるの様を出し

○盗まれて
兎や せん行
と行うゑ
ゐ安に
行方の若男も
あの人の借し
ちゝの松源で
延寿ちゝの
浮ゝ世い

ゐ
ゐ
ゐ

つゞき
母さん放さうものも
ちゝぶ
ふ
ふ
ふ

つき 何事とも
て仕まつらうを
紙入と打て居
出放し方の
雅義ふ
飲る
ふと
思ひ
まつり
の探索
方が相能く
来合せ二人の共
と連まそ行て

一ト喫酒めて
夢ふうと覚ふうろくして
居ふお茶い何で国と出さのよ
サア是ふも海の幸あつて不乃体暇
ふそ安人お出の篠原さんといふお客が
世話ふ仕甲と仰あるを絶よく迎て居り
本ふぶお茶さえがお協りまさるとるもあく
☒ 恥い宵あぶら有ひもあく〇へ夫婦の

☒門へお出あされ始んあら
い笠々と有い出ーふ母さんが怨ふ
迷つて是乃とも今夜始れて
思ふいされと
十四ふ酒場
〇七年の
財美られて
来こ私ー板

つき　母と世間の
浦汁と五ふの仇
義理ある母さんも
嫌なとふ家もみ
裏ろふ丸出しい丸出
牛ふ後丸の世ろ
人力車　金味が悪
さふ不丸の紙已と
丸

▼目が元
むじん　恋ゆ
親へ義理立
ゆ及びま世
面「丸ふ丸丸
でまらろまも
元れ連て逃ち
祝ひへどうも
私が激ゆ「元れ
でいろでる事と
の事と紙に
作ふろふ出ゆ
鹿でどう出ろ

▼ひてあらひ
あーさ羽五日つまくあ家
さんの丸へお寿ねや丸
繋う丸でお目ふかつふ
神こさ夜のお三合セ
どうぞ出ろう祝ふへ
ろと連て逃てやさい
ま一「まぐい祝ふが羽五日
ろうさすく困ろ
知れさすどうも
体ふい通ふ出ゆ「エく怒ふ▼

決て虚でいろけ
きぐも「ろそぐ
ふれば出ろう出
ふ「丸でい浦世の
義理が流ゆ「義理
ふかろけ祝ーちぐ
連て逃てやさんせ
ゆい嫌ふ出らめで
ぐぐの木れ「何ーて
嫌ふるめのぐ
「ろく嫌ふ歌ふ
ちぐひいふいちろ雑
面出ろ丸ろさん「次へ

「つき」上「浮気になりし目に男の形て
あらためてこのごろは世へ出しのぞう
日の暮るをまちかねて連立出る
ますら人目の首尾も宵寄におもと
ある其の飢じく所に物怪も出て
の時雨降る夜にまぎれとのひろへ
せしと忘れて今更に前
に嫁の罪その後々生
ての所のすませ夜と既に
邪らおとのんえはれべ下お家へ
まぞ前なる池へ身を投んと
ます筋に豊三郎の間まで抱
とめ「アレ浮気を見のがまると「豊め

※迫て
やきんせ
此放ては
頼らんぞ
ともかくも
一所に連て
迎られぬ▲

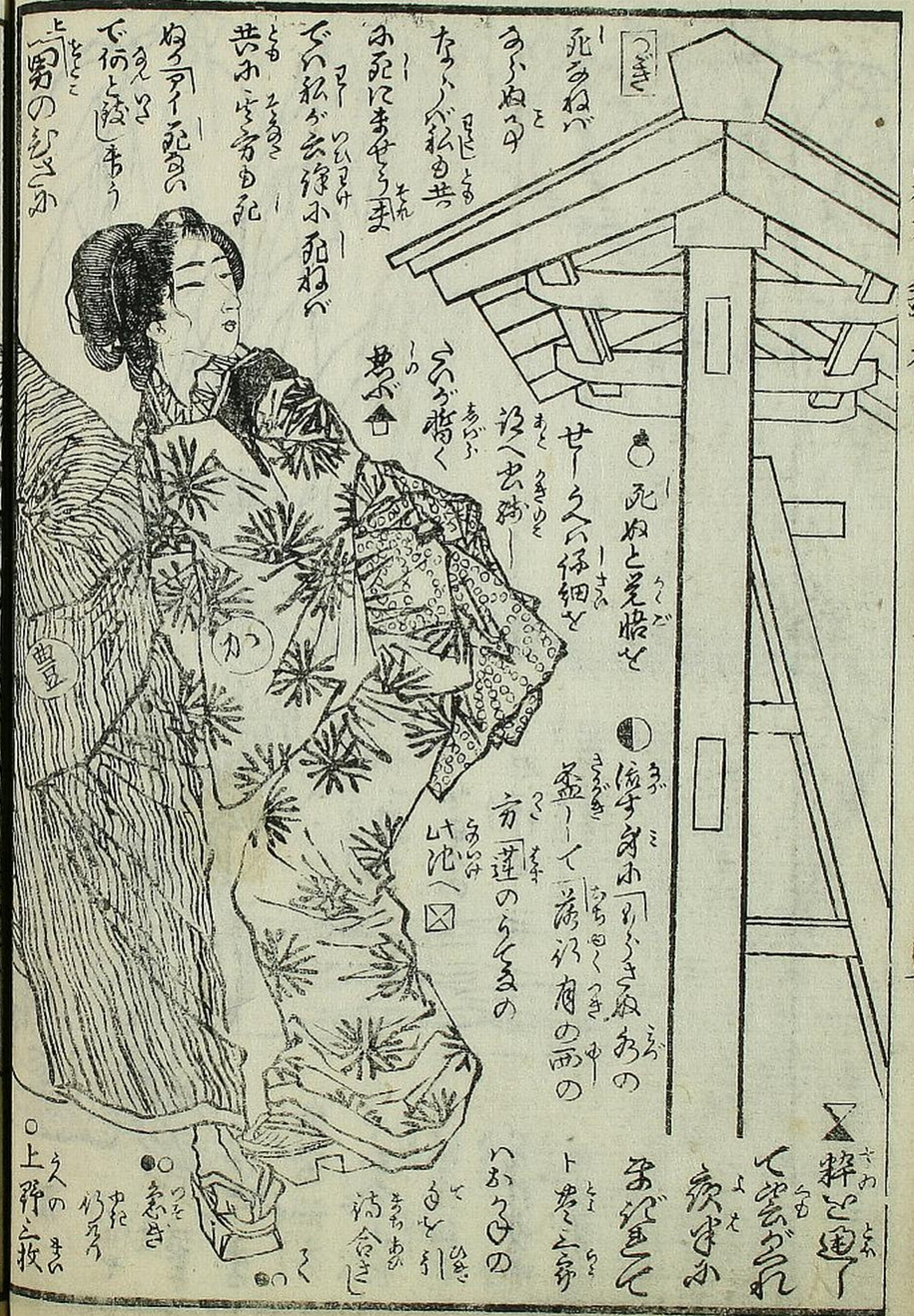
▲先剥抜さる紙への
七十四を先ぶれ
何所へ行にも路用
いらぬ強みはらう
身を投てしまね
ばまるぬ気の咒
雑ま收律を
て迎られね ⧗

むさとおきせ
◐「でさんまし「イヤく
あるみは殺さぬくと
粥とに引止め◪

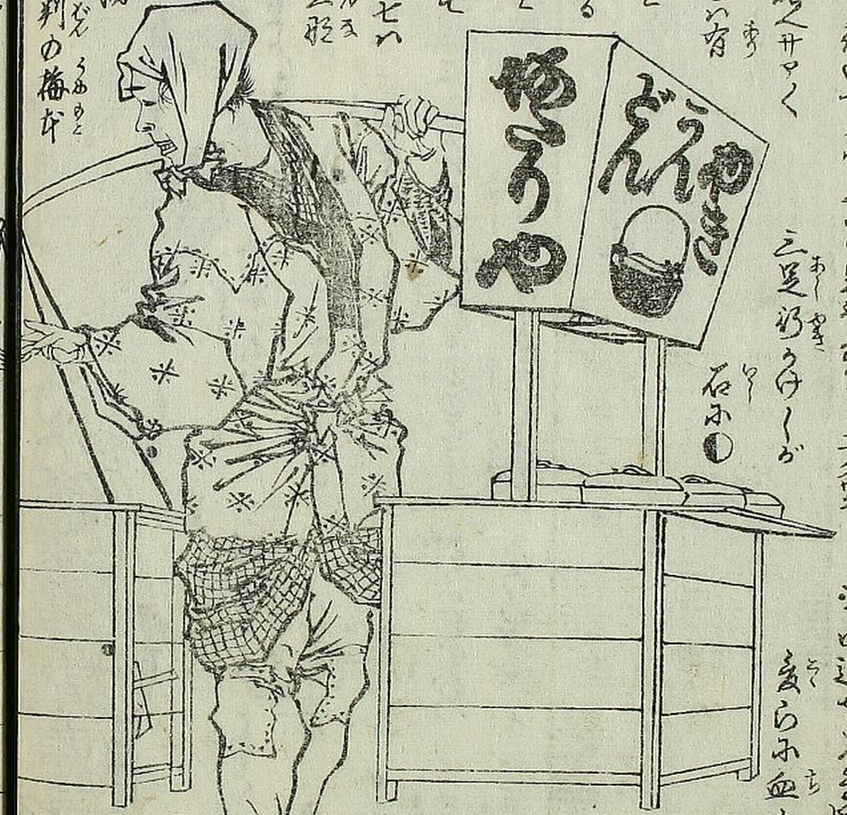
◪「何て縊死
ある事を其の
下や刑を
ちようきまで
哀ひ事ときく
云ふ世を及ぼす
しきまで※

⧗「フリヤ
治りさ
ら

紙入の証出
やお金の去
於に「私も
まり
義理ある中
放に志づく
内へは寄
悪い
「まこと此お前
も笈理やお中にて



つゞき　あいの子今夜の雪ふ　▲ゐる影やうト二タ足
　　三足行みしが
　　石ふ◐
　　ぐつぐつぐつ木ゝと
　　提灯へ捲りそつる
　　うどんやハ又蕎と
　　搾き搗とろろて
　　行ぢぎる行ふ西七い
　　ふ業報「ア」蕎麦形
　　ふ湯ッとめぐ
　　不圓ーうり
　　うら湯湯の夫婦
　　お壌かゆと陰判の梅ず



※四辺と足まぢ「オ、そこら
　　変らふ血のあるこ足蕎や
　　人でもト婦乳
　　ちち儀と足
　　迫り「麦ひの
　　用ふ捕麦で
　　ゐと洗ッて
　　行みと
　　提灯
　　の紐と足ふ
　　ゐと洗ひ行方へ
　　来ゆうとして

の肉の娘ふ婦商夫利とかと
つけて毎日行ふ拵んでそろ　お供とて
まて山寺七ふ祝れ膳へ涙ぬゆ
幾度とあくれ亥ん十せど縁ふ
行でおきてあきぐで
今日い行ふ　お出
ゐみあきれ十財と
ふ　おもお泡りあいの
てろきの湯湯とあろくあ
肉へ寿れて行ふ亦義お婦せ
あきれぐまろう留もあく娘ぐ足ぬと
行来と寿れふ出せ膳ふ蕎や今疾姫と
体豆行ふへう逃でもあきれいせぬうや　安ゆられと▲

◐いあつ紀側ふ「ア」が
起あろて「折角つけと
提灯を既のゆに消せ
ふろ繰いあんぢいふ※
　　蕎ふさつ屋ー
　　紙入とゆふ
　　ふあぐ「麦に
　　紙入ぶ蕎
　　てあろさい
　　中蕎
　　切
　　金と

※消みんぐト　行り提
　　堂と足ん物りは「ャとりや　ていろさふ
　　堂一面が消ぐ提ふ足さ　遠ひあいト
　　提子もあいふと※　提灯の

次へ

つき あるいで歩くなかに「コリヤ若旦那の紙入だ」
扨い掏りの技をこのうち紙入の中を改め
なかに「中のいい大事の紙幣類が
手に入ったらいい女へ
お祭りしたい
今を
人が
捨ての我
手に入れた天の
お助け呼や捜して
ごぎらうらがーも
宿へ帰つてお脱いぜ中し

▲たなかくさし
かるい行うまる按摩の家落

「どうぞ夜ぬけ
ばらうー掏の
○かまい
夜
夜
故
逃
そ
ま
し
て
ま
し
さ
し
て
ま
し
て
ま
し
て
ま

つゞき 楊と海つゝ若の方へトいろ〳〵ふが紅き
悪うらう洞穴者ひ淺茶へ色々
私ハ唱去法ふつゝく
一ふふ来るさの
美い者雑ふぎ
つ米紙いふ
お方ふ知出
合ヤもつえ
収目ゐぐ紙
夕ふ知寄り
ヤ出親者
撰の四利者ぐるどぐ
ませう 紙富人とのひゐさるゞ

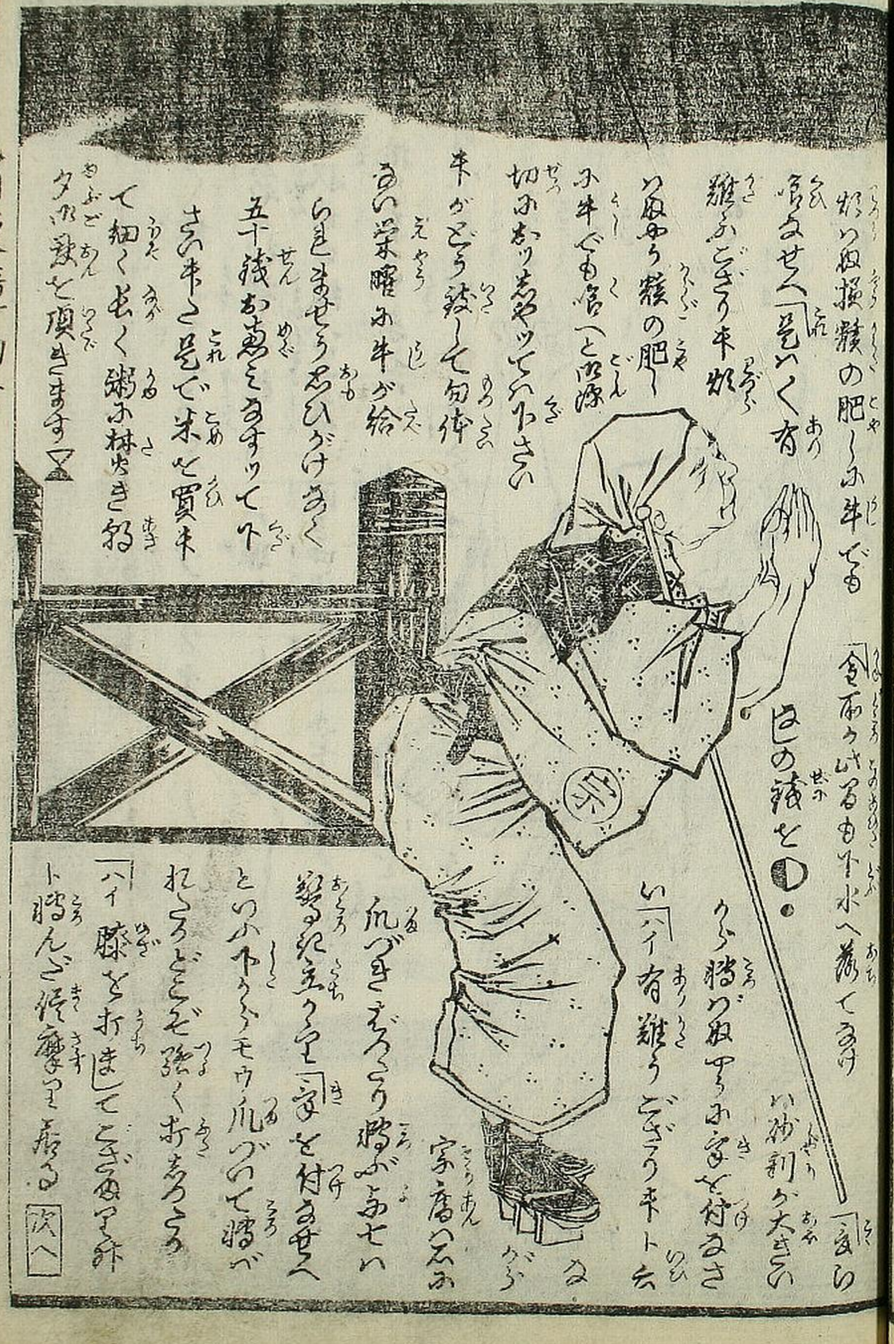
◐ 目がつぶ立すら そう偽る町の
ちのご代の男で 去る者人ふ生云
こぎの米ゞ吉目生て 続し立人の目ぞ
気ふ生年 ちう風縦 思ひ出して 続者悪
儀を続し出すお茶吉も 寿生ぐとろく

◐ お者の撰ふいお茶い ※ 赤い疫を答更迎 下へ

◐ お方と撰ゞ米がコリヤ四ぐ云元
ぐゝごぐう出世風が紙る
姿ふ
紙生さ
紙が旅
ふ米茶の

つゞき 長炬ひを仕 ▲ 此世で鞍ふ阿鼻叫喚猿料 ※ 楊う米が撰
楊匂ぶ山道の目がつぶれ尼 後や家祖代の鬼ふ毒日美 ぐふひ放ふ佐図ふ
分ふ為祝鶴もふく氏ふふ られて宙字ふ迷ふ亡者目茶 上下探んで二百
二日彼ふふ三日と安泊りに 雲いふい出来出世風と目へ笑れ 文と五十を戯
ぐもぐんぐうと 大原
を と 移るとぐるるぐ を ぬで
歩
熊人撰が
喧ふや
告いぐと
あつ者ふい出すが
私ハ喧へぐ〳〵ふ
鐵鬼生の彩る苦〳〵殺〳〵出る
今〳〵ふ〳〵米云を移ふふ法しる
を人の府米世の地獄を移出ぐ ▲
◐ 何の多業も さふ出しるき
出来出世風放人の勧めで 出て下さりま
此間ぐう按摩の示ふふ せト続うま
敗出〳〵て療治を続して ※ 拭を出 次へ

[illegible]洞を拭ふ[illegible]の傑ふ ▼トみを合せ拵むも
家の毒みゆざさうゆふ 商人の見習遠[illegible]
難儀を仕ようるのも 中華[illegible]
[illegible]人の罪とをるさる 云ひ[illegible]
お茶の河い私への美 考が悪い扶子※ ◐義して[illegible]
[illegible]必ら[illegible]仇めい[illegible] 奴内ふ行
[illegible]ト与七 ほしさ「上野おしで 生せう
[illegible]悪い[illegible] 奪の[illegible]
[illegible]と 「お扶[illegible]
[illegible]海 [illegible]
[illegible]「残常[illegible]紙帯を ※これ[illegible]
[illegible]「[illegible]「[illegible]ぞうだ 二人りい
五十銭お茶ふ上る加ら 苦さ「[illegible]改名ふ凡実て[illegible] 稿の方へ
知上本収「義妓ぶと[illegible]金ふ[illegible]ふ



ゆい奴損[illegible]の肥しふ牛でる 「金[illegible]
[illegible]せ人「[illegible]いく有 [illegible]
[illegible]ふこさう牛奴 [illegible]
い[illegible]う[illegible]の肥し [illegible]
ふ牛ぐも[illegible]と西源 [illegible]
切ふ[illegible]ッて[illegible]さい [illegible]
牛がこう[illegible]し[illegible]仲 [illegible]
[illegible]い栄曜ふ牛ゲ給 [illegible]
らも[illegible]せう[illegible]ひげ[illegible]く [illegible]
五十銭お[illegible]ッて[illegible] [illegible]
さい牛と[illegible]で米を買米 [illegible]
て細く長く粥ふ林[illegible]き[illegible] [illegible]
[illegible]ッて[illegible]頂きます ▼

[illegible]の[illegible]を[illegible]の
[illegible]「[illegible]「[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ

つぎ　まだ寒い疵ぐち付いせぬう幡り　寂滅為楽仏法僧と唱ふる
ぐらぐら膝を引張られてやさり　後の方凄く
ませ　どれく搭ッてえせるせと　支えるる宗右
傍へより考やむ機ふ懐より　い腹を
面前を扶前の紙入宗右　開き四辺えやー　ふ七が　こくと伺ひ
ぬつよく拾ひ取ると　ふ七い　鼻へ手を当て息の　ねを放せば
翌日取んとする内　ふ七い
紙入を
奉とうとあて宗右
ダふ七の振脇下より
突ぶ不云を打きて身を
ひぐ又ふ七い後を押へ
ぐぐ「コリヤ挨ア
みハト云みて言ーむ

ふ七宗右が紙入を
にふ入ひ主上ひつま
拭と首ふ春ア
メ付きび自足をのび
ヒ七拾八例絶ふふ七い

○主人「偽ふて
足向ひ紙
入ひう十円れを
取出ひ打ひ来る。

○用新ふ紙幣を数へて

つき　お笑ひ

▼仕舞湯ようも温まるくせやとぎりの紙入を迎へ行さつ紙幣を財布へ入宵小唄

さあ内方を古々の九十九里溪場へ　ト唄ぐらぶん

切て下様き百と二百の資本と様日分　ぴく乗りが

とゝるを金

でも儲さく　▲「オイ桜ア

さんく

▲菩さま　那方でもあんが

▽鶴の

「イヤ唄なき

ま生ーしゝ

尾張

▲「良ク焼うどんや　「ちつとお茶ホ

でゞきのトロ

ろ○宵松後

の子拭い式茶茶で

ぜんぶ

紫陽

「ちつとお茶ホ

ぜんぶある

藤治

藤治を仕

ト宗庵へ〆殺〆るを拭と多。「人ホ元ア

ぜんぶ

舞ツて後り

内ホ七の様の底元付てギックリ

ぎっくり

しゝ腰痛と

ぎっくり半ウ

つゞき
せら笑ひ
酒の
月宵の仕舞
家作の中
已まで伝ふる
酒の
金ぴら一杯
酒の
金

眼の
独言の
青い仕事
金ぴら大どんぐり
才延命ト云ふ
紙帳と称して

「つゞき」「モシとりやア何程宿来へ」「あのゆく小紙幣が
出く方いうふ字の毒ぶ二十銭ぐ「何小紙幣ぢやア
限ふれへ大紙幣ぐ足ぶ廿せへ「何ぶと三十銭や
三十銭の足し銭が入る
ねく人ト打き付る
宗庵ハ拾ひ取
「ゆうぎすア
よしねへ
天下の
宝ぶ無理ふやうとゆりやア
去ねへ「三十銭の足紙幣ハ
繁がうとゆつても貰れねへが
前前盗んぶ七十四銭ぶ

●○あつらへ向ふ程ふ奏てめぐひ恩禄へぐ
姿をく人らひ迎ねへと肉と箱根
向ふへ言郭ふ三大将の雑を
のうき
●かよう取をせ
巴きぶいふ目が見出と
かくぶふねへ役ぶろ人の猫を引さらひ
宿場へ帰く白引悪い常さぶ帰るまり
後ろ向よりの
遠物路秋
菜の在々

ねへといつても若ぶのぶ「大ぶ
尋ねく云出しまサア」
拵ア二才腰弁をメ
殺して盗んぐ金を
ゆふひて「山満町から
損料で借りさり
家と思ひの外成方も
此の金毘羅参りが身舟ね
「まをお前ハ今翁ツうろ目がろんえ
あぶら悪い者ぐ三年跡を下若
うゐ流草うけてどろつ死出歩き
盆の上ざ小天狗と異名を
取く狸波小僧金助といふ●
久しい猪ふ常る番屋が●○
○だんまり
不出く金ぴら参り
ふつとまをおひ出し
大きる面が小及異ふ●○
鬼を忍び堂
ハ天狗ふきろ
ろうさ帝代な
孤客の
奴茶と
壮も烟知れ
収茶売夜
へ人目を縫
る山牛若
よりもて
業
▲此方や
彼方へ飛込で
只取る袖ふ三熟の
▲

次へ

つぎ　毎日釣るる天物の生醉ぢ地酒を　◇蟹でも覗ふ事ろ〻ろ何
香ざかな蔭ふ悪い嘶もろく鍔め羽根と　でもかでも横に引き鍔が
ひろげて赤茶一杯ありろく　利てるが長く出ると親父が
海一番迄を綾の餌食ふ仕て仕舞ふ
とりろこと仲買に助けろ事
雑魚桶の問屋ふ幸　季蛙　公

◇七十　四寸蟹耳ふ　問ろ上ろ八兄通

◇りろふ着いと云ろ〻ろ　濱辺ふ
己れそんな威〻いあん生まり目茶が　居る政
ハそれ〻〻「ろ」と己れと上下二面文のでも　十四五ろ〻
横広ろと云って居るろく年そして　品川様へ
此様ふ云の人人れ〻〻れど　藤ぎ

出事が出来れ〻〻性
分雲乳ふ為らふとろう
なも又も魔及へ濱ふやア
ろれ〻〻トふの生家
家茶ろ〻天水桶ふ便せろ
煙草入と風呂物附ふで
たぐとと吾家ぐらせろ笑って
張ろ「ろ」が「モウ云ぐ云ぐま張ろう
生少ろ〻と奥ふろ〻ま茶柱
めの大天物食ひ〻寄ふれ
夏ろ濱波ふ傍の食助さん
ろ茶ふ立流ろ肩出附ろ好ろろ
天が三十ふ居ろろ〻ぐの二才ろう◇

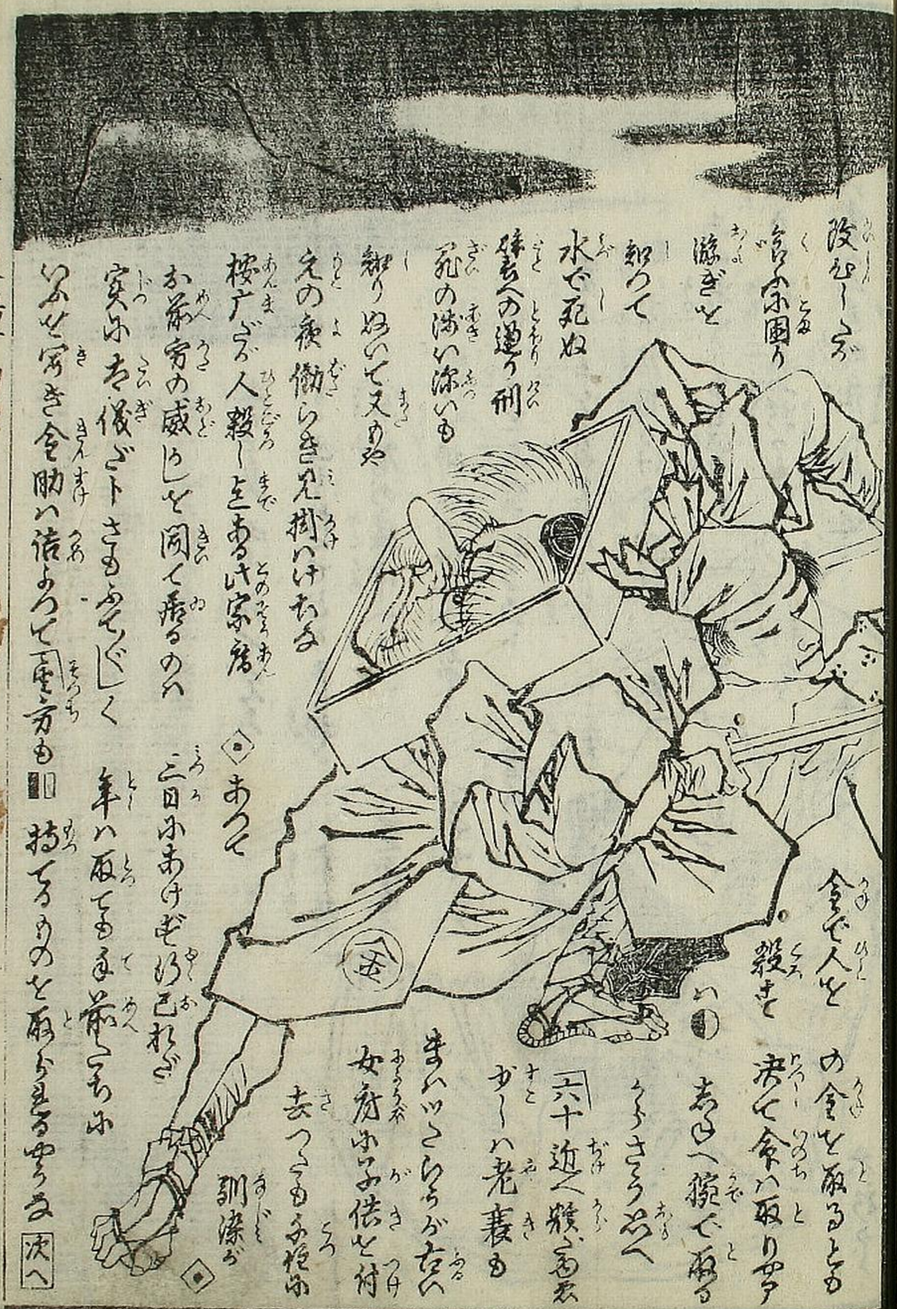
踏て写て張ろ事
ぬろ物て生れと
曲ろと根生
ハい達去
ふ

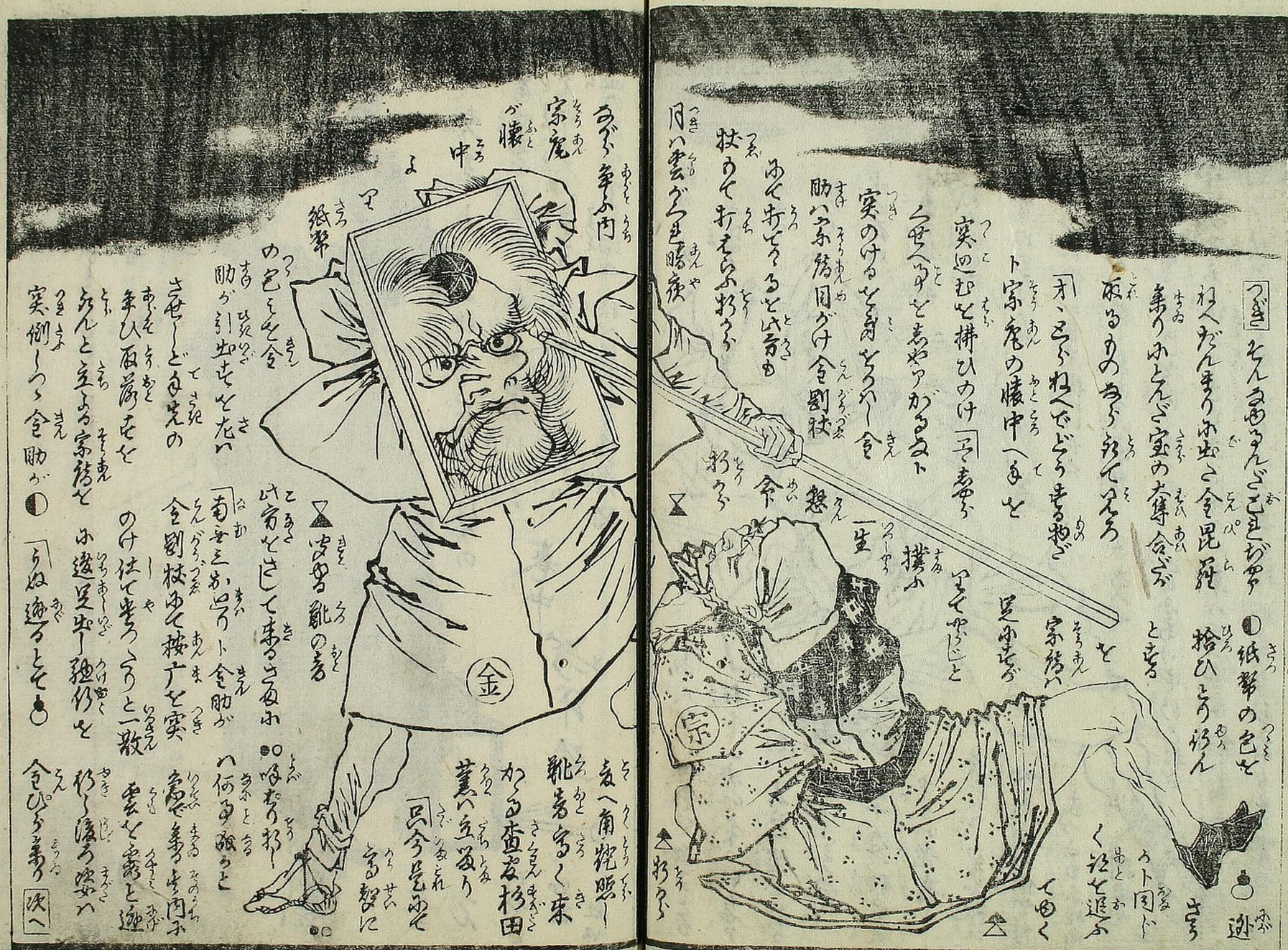
きく
れと面ふ

生ー
殺ふい
港ろう
源い鼠
のろに人
力物
と物
通
しく
夫ろふ家業
の仲買一
入り押備
強法　八ぎ

生ろ〻れ〻九十九
源泉の己ら生醉ぐろ◇

つぎ　悪縁未だ去らぬ旧幕の□笑くのぶ古儀あり方も　□けらみ奴ごと
附ふの痛一様と咨貧ちるびと　殺りて家のが古儀ご　あつて居るのごたく
院に入善未まりて　泡と沖と　ばくらさうなりと云ても　千四盗まうとも
就へ今後い首が白らいと　時代かられの老衰まり　ぎて居ふまる有
あつと附が出一新発ふい　ちあびと猿の入墨と　自慢ふ色る同分ふい　ぐひか上の
金と助　七十四いと　金ご　出法と知う
くさい　▼今の世　界で百四ふ　金ご　牧くの七十四で
悪　金ご　人と殺しかア
風ふあつと　▼　長く首ハ付た
助け紙天の恵と　金の知つれくが出さ　張れくぜりられく
宵雑く坊白に　金ご出ア百麻毛さ
祝てをいそうと　ふつれく　るごこらアる茶




つゞき
そんあまうんざこまぼ
ねくだんまりかぶ出さ金昆羅
寄りかとんざ宝の大等合ざ
取るあめ寄らあてはそろ
「オ、こらぶねくだらぶ寄る物ざ
ト宗覆の懐中へ手を
突込むと排ひのけ「コ」寄る
ムせくをあやアがるなト
突のけるとあ身をろへ金
助は宗覆目がけ金剛杖
ゆと歩てるとと方も
杖うそおそふおろう
月は雲がくれ暗夜
拾ひとり杉ん
と言る
宗覆は
足ふ出ず
「ア、やらじ」と
撲ふ
怒
一生
金
宗
杉ん
ト同じく
紙帯の色を
逃
言ろ
ト同じく
紙を退ふ
杉ん
宗覆が懐中
紙帯
金
助が引出せを左い
のけ仕て寄ろうと一散
ふ逃足出し独作を
形し涙ろ変へ
雲と霧と逃
形ん涙ろ変へ
金ひら寄ろ
次へ
ト同じく
紙帯の色を
拾ひとり杉ん
言ろ
ト同じく
紙を退ふ
杉ん
宗覆が懐中
紙帯
金
助が引出せを左い
のけ仕て寄ろうと一散
ふ逃足出し独作を
形し涙ろ変へ
雲と霧と逃
形ん涙ろ変へ
金ひら寄ろ
次へ

倭洋妾横濱美談

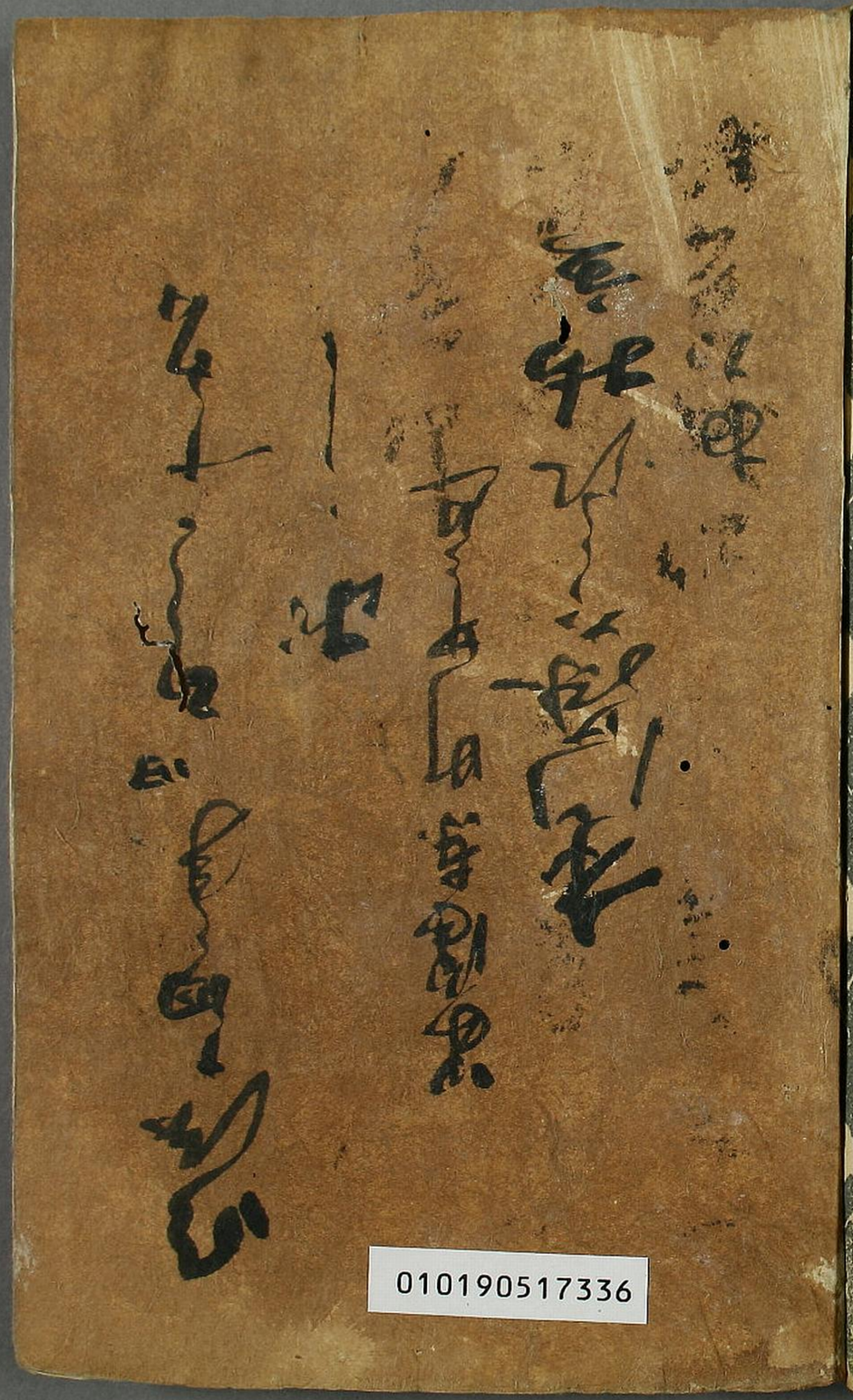
三冊 武田交來録
近刻 揚洲周延画

這回い現今横濱在留の英人何某ガ暗ふ両個の妾ヒ寵愛薄劣
とうとみて竊ふ私恐をふくを屢々奸計をめぐらし無実の罪ふ陥
ヲヒ苛酷の呵責ヲ仕女の忠義と天の恵賜ふ迅速白日ふ青天ヒ拝
ヒ汚名ヲとれ仇ヒ恩ヲて報ひ〜い開港以來未曾有の珍聞美談
と賞賛なす世説の俗ヒ一小冊ふつづまたる勧善の物ごヒたり

御届明治十三年九月十三日

東京書肆

深川区西元町八番地
編輯人 武田勝次郎
神田区塗師町二番地
出板 昭和 年 月 日 版権免
船津忠治郎



010190517336

明治十四年一月吉日

求之

業學所

市川藤左衛門

都合四冊之内